

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370833

研究課題名(和文) 東アジアにおける墨書土器・墨書陶磁器の発生と発展の時間および空間的分析

研究課題名(英文) Time and spatial analysis of occurrence and development of Pottery with writing in ink and ceramics with writing in ink in East Asia

研究代表者

石黒 ひさ子 (Ishiguro, Hisako)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員

研究者番号：30445861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では墨書陶磁器資料の基礎的集成として明治大学日本古代学研究所墨書・刻書土器データベースに六朝建康城遺跡、江蘇省鎮江、包頭燕家梁遺跡、隋唐洛陽城の墨書陶磁器データベースを公表した。また墨書陶磁器の空白時期である唐代には墓誌罐があり、この墓誌罐が日本出土の陶製経筒と類似することを発見し、これについて学術報告や論文発表を行った。

中国では江蘇省南京・常州、福建省福州・泉州、上海市青龍鎮・浙江省杭州・寧波・慈溪・上虞、国内では博多遺跡等で墨書陶磁器の現地調査を行った。墨書陶磁器は貿易陶磁及び東アジア交易圏の理解に重要な存在であり、現地調査で得た情報も可能な限り研究成果として発表する予定である。

研究成果の概要(英文)：This research is a study on ceramics with writing in ink. As basic composition of materials, I published databases about remains of Jiankengcheng, Zhenjiang, remains of Yanjialiang and Luoyangcheng of Sui-Tang period to Databases of Meiji Univ. Research Institute of Ancient Japanese Studies. Also in the Tang Dynasty, which is the blank period of the ceramics with writing in ink, there are Ceramic cans written with epitaph. I discovered that this is similar to the ceramic Kyojutu (経筒, cylinder containing the scriptures) excavated in Japan, and gave academic reports and papers on this.

I also conducted a field survey of ceramics with writing in ink at Nanjing, Fuzhou, Shanghai, Hangzhou, Ningbo etc in China and at remains of Hakata in Japan. Ceramics with writing in ink is an important presence in the understanding of the trade Ceramics and East Asia trade area. The information obtained from the field survey is scheduled to be announced as research results as much as possible.

研究分野：中国史

キーワード：墨書陶磁器 墓誌罐 経筒 貿易陶磁器 博多 東アジア交易圏

1. 研究開始当初の背景

中国南朝建康城発掘により三国呉から晋代頃の墨書陶磁器の存在が確認された。墨書土器研究の第一者と位置づけられる平川南は日本で8世紀ころから見られる墨書土器について、中国とは異なる性質を持つととらえている。だが土器に墨書するという行為は日本列島のオリジナルではなく、近年韓国でも出土が報告されている。とすれば日本の墨書土器の起源についても朝鮮半島あるいは中国に何かの根源を考えることも可能となる。

中国南朝時代の墨書陶磁器の出現は、それを日本墨書土器の源とすることも可能である。日本墨書土器の根源を中国とみる研究はこれまでにないが、それは中国墨書陶磁器に注意が向けられていないためとも考えられる。日本各地から出土する墨書土器は、すでに膨大な量となっている。木簡などの出土文字資料に比べ、墨書土器は一つの器に数文字しか文字のないことが多いが、考古学と文献史学を結ぶ接点として重要な出土遺物である。漢字文化は中国で生まれ、日本に伝来したものである。器に文字を記すことと文字の伝来との関わりは不明であるが、中国南朝が古代朝鮮半島、日本と文化的に深く関わることは考古学的成果にも見え、南朝時代の墨書陶磁器の墨書形態は日本墨書土器に類似する。

また墨書陶磁器資料として著名なものに、博多出土の墨書貿易陶磁器がある。この発見から中国の晩唐、宋代以降の墨書陶磁器の存在も指摘されている。南朝建康城で見られた墨書陶磁器と後代の墨書陶磁器の関係についても不明であり、考察が必要であった。

2. 研究の目的

漢字は中国発祥のものであり、墨書土器に多くみられる須恵器も中国、朝鮮半島の影響を受けたやきものの器である。従って、日本で作られた墨書土器は、その根源に中国と何らかの関係を持つはずである。

中国では器に文字を記す、という行為は青銅器の銘文に代表されるように古くから行われている。殷代の甲骨文字を経て、西周になると青銅器に銘文が鑄込まれるようになる。だが、文字がより一般化し、簡牘を文字に記した文書行政、更に紙を使う時代になると、青銅器銘文のような長文の文章が器に記されることはなくなる。日本に漢字が伝わった時代、中国ではすでに簡牘、紙が併用される文書行政の時期となっている。漢字の発明地である中国の漢字文化と、文字を初めて受容した日本の状況を一元的に並べることができない。

そのため、日本に漢字が伝わる前後の時代に、中国に器に文字を墨書するという文化が存在したのか、を確認する必要がある。だが、このような作業を行ったものはこれまでの

研究には見当たらなかった。墨書陶磁器への研究は中国でも発展途上であり、まずデータベース化等による解明が必要である。それによって、朝鮮半島及び日本墨書土器のルーツとしての中国墨書陶磁器の実態や漢字文化の受容とそこで現れる変容の一側面を示すことが可能となる。そこで、本研究では墨書陶磁器について、資料収集を行い、データベース化等によってその性質を解明することを目的とした。

3. 研究の方法

中国墨書陶磁器は三国呉から晋の南朝時期のもの、博多墨書貿易陶磁器を含む晩唐から宋代以降のものが現在確認できる。南朝墨書陶磁器は発掘報告のあるものは数点だが、科研「東アジアにおける日本墨書土器データベースの構築」で行った南京調査では、南京で発掘された南朝都城建康城遺跡から数十件の墨書陶磁器が発見されていることが判明し、発掘担当者の王志高氏を招聘し研究交流を行った。ここからデータを整理し、データベースの作成を行う。晩唐宋代以降の墨書陶磁器は日本の福岡博多遺跡から大量の出土がある他に、内モンゴル燕家梁遺跡、福建省福州、江蘇省揚州・鎮江からの出土もある。これらの資料をもとに、類似する遺跡等からの出土事例を収集し、特に空白となっている南朝時期から晩唐の間の資料を探求する。

日本墨書土器については科研「東アジアにおける日本墨書土器データベースの構築」により明治大学日本古代学研究所でデータベースの集積が進められている。作成した中国墨書陶磁器データベースもここに加えることによって、中国墨書陶磁器の分析を進めるとともに、日本墨書土器との比較研究も可能となる。

また、陶磁器の研究には陶窯の研究も欠くことが出来ない。陶磁器は陶窯によって生産地域が限定されるため、交易について考察するためにも陶窯の位置とその性格を知ることが重要である。南朝時期は陶磁器の生産地として著名な浙江省越州窯での陶磁器生産が飛躍的に増加した時期である。一方、近年の考古学発掘では湖南省湘陰窯で作られたと考えられる南朝陶磁器には、釉薬の下に文様を描いて絵付けをした釉下彩の技術を持つものや、官窯を示す刻字のある陶磁器や制作にかかわる用具が出土している。釉下彩は染め付けの技術と理論的には同じであり、その発見は陶磁器研究に衝撃をもたらすものでもあった。このような先進技術をもつ湘陰窯、大量生産していたと考えられる越州窯及びその周辺の窯址についての考古学的資料を集成することは、墨書陶磁器の生産地を考える上でも非常に重要であり、さらに朝鮮半島、日本列島を含めた陶磁器交易を解明するためにも必要な作業である。

データベース作成には現地調査による画

像資料の収集が必要である。墨書陶磁器出土が確認できる地域での実見調査と画像収集に加え、明治大学日本古代学研究所と連携のある中国社会科学院からも情報を得て現地調査を行い、墨書陶磁器の出土状況と、それに関連する陶窯遺跡について、現地研究者からの情報収集に努め、現地踏査、実見調査を行う。

4. 研究成果

(1) 墨書土器資料集成

南京建康城出土六朝時期墨書陶磁器について、現地調査を行い、データベースを作成した。南京大学教授賀雲翱氏より中国江蘇省鎮江出土墨書陶磁器データを入手した。このデータは年代、生産地に検討を加え、データベース化を行った。

明治大学・中国社会科学院主催の「中日交流与中日関係の歴史考察」学術シンポジウム参加時に、社会科学院考古学研究所副研究員韓建華氏より隋唐洛陽城白居易故居遺跡から墨書陶磁器が出土しているという指摘を受けた。当該遺跡は報告書が刊行されており、ここから隋唐洛陽城データベースを作成した。また、内モンゴ包头燕家梁遺跡についても刊行された発掘報告によりデータベースを作成した。以上のデータベースは全て明治大学日本古代学研究所墨書・刻書土器データベースに公開している。

六朝建康城遺跡墨書陶磁器データベースでは三国呉から南朝(3世紀~6世紀)、江蘇省鎮江墨書土器データベースは宋代~明代(11世紀~14世紀)の墨書陶磁器を集成したものであり、この二つは中国南方の近接する地域での時期の異なる事例を紹介したものとなる。また包头燕家梁遺跡発掘報告データベースは元末明初(14世紀)の遺跡の出土品で、中国北方の草原ルートに繋がる地域のものである。隋唐洛陽城(1959~2001発掘報告)データベースは洛陽城白居易故居より出土した宋代(11世紀~12世紀)の墨書陶磁器の集成である。これらデータベースにより、南方の南京、鎮江と、北方の内モンゴ包头、中原中心地洛陽、時期的には三国呉から明初のデータを揃え、墨書陶磁器の発生と発展の時間・空間的な情報を公開することができた。

中国墨書陶磁器実態調査のため、中国南京大学で学術情報交換、資料収集を行い、墨書陶磁器は宋代以降中国各地で大量に出土することが判明した。南京大学による南京郊外での考古学調査で出土した宋代の墨書陶磁器の実見調査を行った。これについては出土地情報等が未整理でデータベース化は実施しなかった。

南京大学教授賀雲翱氏の紹介により、浙江省寧波、江蘇省揚州・常州での墨書陶磁器調査を行った。寧波には墨書陶磁器の出土がほとんど無く、また揚州には数点の墨書陶磁器が存在したが、いずれもデータベース化には

到らなかった。常州には唐代からの資料が存在することが判明しているが、整理中である。また賀雲翱氏からは山西省太原で個人により収集された墨書陶磁器コレクションについても教示を得た。

岩手大学平泉文化研究センター主催国際シンポジウム「平泉と東アジアをつなぐ - 貿易陶磁器にみる交流の様相 - 」で知己を得た浙江省文物考古研究所研究員沈岳明氏、同鄭建明氏の紹介により、南京建康城出土六朝時期墨書陶磁器が生産されたと考えられる初期越窯となる上虞禁山窯遺跡の実見調査、発掘中であった唐代から宋代にかけて越窯最上級品を生産していた慈溪市上林湖越窯秘色窯遺跡の実見調査を行った。杭州市内では杭州南宋官窯博物館研究員沈潔如氏により、同館に所蔵されている南宋時期の墨書陶磁器を実見調査した。これは個人の収集品が委託されたものであるため、写真撮影、データ公表は不能であった。

同じく「平泉と東アジアをつなぐ - 貿易陶磁器にみる交流の様相 - 」で知己を得た福建省博物院副研究員羊澤林氏の紹介により、福建省福州市出土の墨書陶磁器実見調査、福清市少林寺遺跡出土の墨書陶磁器実見調査を行った。資料の公表を待ってデータベース化する予定である。

(2) 経筒研究

南京での墨書陶磁器調査により、唐代の墨書陶磁器が見えないという問題が判明した。唐代の墨書陶磁器について情報収集する中で、南京大学賀雲翱教授より、唐代の陶磁器上の文字資料として「墓誌罐」の存在を指摘された。寧波に隣接する慈溪市を中心とした越窯周辺では、唐代晩期から五代十国時期墓誌を陶磁罐に刻む「墓誌罐」が存在する。唐墓誌罐研究は慈溪市博物館館長厲祖浩氏の資料集成でようやく全容が解明しつつある。壺状の器に墓誌を記すというのは日本古代に見られるものであり、東アジア地域の観点からも貴重な資料である。また九州から出土する経筒には陶製のものがあり、中国華南地域の製品と理解され、文字の記載はないが、その形状や大きさは墓誌罐とほぼ一致するが、墓誌罐と経筒の類似はこれまで指摘されていない。この墓誌罐と経筒の問題から博多を中心に九州で日本出土の経筒調査も行った。墓誌罐は慈溪市博物館・余姚博物館愛で実見調査を行い、慈溪市博物館館長厲祖浩氏より詳細な出土状況や資料の特徴の教示を得た。

以上の資料集成をもとに、平成27年度に明治大学・中国社会科学院主催の「中日交流与中日関係の歴史考察」学術シンポジウム(第五回)で「墓誌罐と経筒(越窯罐と日本出土の経筒的比較)」の学術報告を行った。さらに平成28年度には『宮崎県地域史研究』第32号に「宮崎県出土の経筒と陶製経筒・墓誌罐の比較をめぐって」として論考を発表

した。すでに考察してきた日本出土の陶製経筒と中国出土の墓誌罐の形態的相似の問題に加えて、宮崎県から出土した陶製経筒についても検討した。中国では墓誌罐については類似の資料のないものと扱われ、また日本では陶製経筒は中国から輸入されたものをいう理解は共通しているが、中国には類似のものがない、という理解であったため、それぞれの研究者に興味深い事象としてインパクトをもって受け入れられた。

(3) 東アジアにおける墨書陶磁器の意義
当初の計画では、六朝建康城遺跡墨書陶磁器の発見から、日本における墨書土器の起源の一端を探ることを計画していた。しかし、六朝時代の墨書陶磁器は、南京以外からの一括出土はまだ出現していないことが判明した。一方、日本では博多遺跡から墨書陶磁器が大量に出土するが、中国には類似の事例は少ないと考えられてきた。

中国の事例として知られていたのは、福建省福州からの出土で、博多墨書陶磁器と同じく、中国宋代のものが中心である。本研究で墨書陶磁器資料を収集したところ、宋代中国には多くの墨書陶磁器資料が存在することが判明した。既にデータベースを作成した江蘇省鎮江、隋唐洛陽城の出土品も宋代が中心であり、包頭燕家梁はさらに時代が下がった元代である。調査を実施した江蘇省南京、揚州、常州、浙江省寧波、杭州、福建省福州、泉州いずれの都市においても宋代の墨書陶磁器は確認できた。また山東省膠州市板橋鎮でもまとまった墨書陶磁器の存在が報告され、中国における水中考古学の進展から沈船からも墨書陶磁器は発見されている。

中国宋代には墨書陶磁器は珍しい存在ではない。加えて近年の都市開発による考古学発掘で資料数も増加している。墨書陶磁器を資料として活用するには、日本古代における比較よりも、東アジア交易圏が拡大する中国宋代、日本古代末期から中世時期が重要であるという理解に到り、貿易陶磁と墨書陶磁器の関係により重点を置くことになった。

東アジア交易圏においては福岡鴻臚館遺跡、博多遺跡の重要性はいうまでもない。宋代中国の交易圏において、博多はその周辺に位置する交易港の一つにすぎないが、都市内部が継続的に発掘され、詳細な報告書が刊行されている唯一の都市遺跡であり、膨大な資料を有している。

福岡博多遺跡の現地調査は南京大学教授賀雲翱氏の研究協力を得て実施し、博多出土の貿易陶磁器については、従来指摘されている浙江省龍泉窯や福建省同安窯の他に江蘇省宜興窯の製品が一定数含まれているという指摘があり、貿易陶磁器の生産・流通および陶磁器の墨書との関係において大きな示唆を得た。

また平泉文化研究センター主催の国際シンポジウム「平泉と東アジアをつなぐ - 貿易

陶磁器にみる交流の様相 - 」では国内の中国陶磁器研究者の多くと意見交換しただけでなく、中国山東省・上海市・浙江省・福建省から来日した現地の陶磁器発掘に関わる考古学研究者と積極的な研究交流を行い、貿易陶磁や陶磁器の焼成窯について多くの情報を得ることができた。

墨書陶磁器は博多出土のものと類似のものが韓国馬島の水中遺跡から出土している。これは博多における墨書陶磁器、また東アジアにおける墨書陶磁器の理解に重要な存在であるため、韓国語による報告書の翻訳を実施した。今後これによるデータについてもデータベース化を進める予定である。また一点のみであるが、奄美大島と路島において「綱」字のある墨書陶磁器が発見されている。「綱」字は博多遺跡、馬島水中遺跡出土の墨書陶磁器に共通する要素である。「綱」字墨書陶磁器は台湾澎湖島の出土がある。今後の展望としては、これらの要素を繋げて、中国からの交易ルートを明らかにすること、また陶磁器の対価として日本から持ち出された交易品への考察を深めたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

石黒ひさ子「宮崎県出土の経筒と陶製経筒・墓誌罐の比較をめぐって」、『宮崎県地域史研究』32号、査読有、1-13頁、2016

〔学会発表〕(計 1 件)

石黒ひさ子「墓誌罐と経筒」(口頭発表)、第五回「中日交流と中日関係的歴史考察」学術シンポジウム、中国社会科学院国際合作局・明治大学主催、2015年11月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

六朝建康城遺跡墨書陶磁器データベース

http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/o_bj_bokusho.html

江蘇省鎮江墨書土器データベース

http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/o_bj_bokusho.html

隋唐洛陽城(1959~2001 発掘報告)データベース

http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html

包頭燕家梁遺跡発掘報告データベース

http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石黒ひさ子 (ISHIGURO Hisako)

明治大学・研究・知財戦略機構・兼任講師

研究者番号：30445861

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

賀雲翱 (HE YUNAO)

南京大学・歴史学院・教授